九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

観ること・看ること・診ること ： 実践と人類学

野村, 亜由美
長崎大学

https://doi.org/10.15017/2338975

出版情報：九州人類学会報. 31, pp.65-65, 2004-07-17. 九州人類学研究会
バージョン：
権利関係：

セッションB・趣旨説明

観ること・看ること・診ること
—実践と人類学—

野村　亜由美
（長崎大学）

近年、日本の国際援助や医療の世界では、現場から人類学の必要性が求められている。その原因の多くが、これまでの活動が現場になじまないことであり、一枚岩的な視点で対象を捉えるような研究方法に疑問が投じられていることにある。

今回、九州人類学研究会の分化会に当たり、本セッションのテーマを「実践と人類学」とした。すでに自分の研究を温めている者が各自の研究をより深めること、また研究を共有することを目的に、それぞれの経験から人類学を考える契機となるように設定した。

本セッションが「実践と人類学」というテーマになったいきさつは、報告者のそれぞれが医療、NGO 活動、国際援助・国際協力に携わった経験があり、その現場での経験が人類学に関心を持つきっかけとなったからである。各自の人類学との出会いは様々であるが、本セッションの一番の特徴は、人類学のフィールドとして現場に出向いたのではなく、報告者のそれぞれが現場の経験を起点として人類学に出会ったことにある。なぜ出会ったのが人類学だったのか。

それぞれの領域で、人類学がどのように活かされるのか、あるいは活かされないのか。人類学を学ぶ以前に体得している技術や知識は、実際に人類学的調査研究の場で、どのような影響を与えているのか。また、人類学的手法を自らの問題関心の中でどのように取り入れるのか。

日本・アフリカ・ラオス・バングラデシュにおける経験（観ること・看ること・診ること）を通して、それぞれが人類学への関わり方について考察し、人類学の可能性について検討する。

そこで本セッションでは、各自が人類学に出会うまでの経緯を述べ、現在の関心領域と今後の課題について報告する。

本セッションを進めるに当たり、自己を振り返るという苦しい作業を行う中で、迷い顛倒した嫌いもある。今回の報告で皆様からの忌憚のないご意見を頂くことによって、各自がこれからのより充実した研究へと繋げていくことを切望したいと思う。掲載は発表の順に行う。

なお、徳永瑞子さんの投稿論文は、本人のご都合により見送らせて頂いたことをお断りしておく。

〈発表者〉

・野村亜由美（長崎大学）
「看護における人類学的実践の試み」
医療者として人類学を学び、人類学からもとの現場を再考する際の課題について考察する。

・有馬　未希（九州芸術工科大学）
「NGO から人類学へ—バングラデシュの事例より」
地下水砒素汚染問題に取り組む NGO の活動現場における、応用人類学的調査の必要性について考察する。

・嶋澤　恭子（熊本大学）
「医療援助と人類学についての一考察—ラオスでの経験から」
「救済が必要な人びと」を構築した援助の経験と、「現地に適した開発」の調査経験から人類学について考える。

・徳永　瑞子（長崎大学）
「アフリカでの医療協力の現場から人類学について語る」
アフリカのエイズ患者と関わる上で無視できない、呪術と伝統的治療師と風習の世界について紹介し、教育に人類学をどのように活かせるか考察する。